

# HIS (Human-oriented Information Systems) 研究会活動報告

## Study group report : Human-oriented Information Systems

川野 喜一†

Kiichi Kawano†

### 要旨

情報システムに関する業務やイノベーション、教育・研究の経験や成果、考え方を学び、その課題や解決策について、人や組織、社会、文化、経済、環境、地域など幅広い視点から議論することにより、情報システム学の研究や実践の課題を考えることをテーマとして研究会活動を行っている（主査：川野喜一，幹事：竹並輝之（元新潟国際情報大学），魚田勝臣（専修大学名誉教授），中嶋聞多（一般社団法人地域活性機構），伊藤重隆（元みずほ情報総研株式会社））。2018年の活動の概要を報告する。

## 1. はじめに

IT/ICT を利用した情報システムは、クラウド、ビッグデータ、IoT、AI など様々な技術が主導する形で複雑で多岐にわたったものになってきており、情報システムが、システム開発やビジネスの現場のみならず、暮らし働く個人と密接に関わり、社会全般に亘って相互に深い影響を与えるようになってきた。

本大会のテーマ“人・技術・環境、求められる共生～シンギュラリティの再考～”は、まさにこの状況と課題を捉えたものであり、人間中心の観点に立って情報システムを捉え、考察を深めることがますます重要になっている。

## 2. 人間中心の観点に立つことの意味

“AI 技術と人との係わり”と“組織内のコミュニケーション”についての講演と、参加者を含めた議論を通じて“人間中心の観点に立つ”ことの意味について考える機会を持った。

### 2.1. 人間中心の AI 技術

第8回研究会（3月27日）では西垣通先生（東京経済大学コミュニケーション学部教授，東京大学名誉教授）から「人間中心の AI 技術」のタイトルで、基礎情報学や社会との係わりの観点から、人間中心の概念、AI 技術で問われるべき問題についてお話しいただいた。

- ・人間の生きる権利や自由意思を尊重し、人間が機械部品のようにならない人間中心主義（human-oriented）が重要である。
- ・近代合理主義を出自とするコンピュータ、AI と AI ブームの本質とは何か。
- ・生物は自律的な存在（autopoietic system）であり、AI は疑似自律的な主体でしかない。
- ・シンギュラリティ仮説はグノーシス神話に過ぎず（AI 哲学者ガナシア）、生命情報を創造しながら生きていく人間に対し、AI は機械情報を高速論理処理するのみで、自由意思もなく責任もとれない。
- ・AI が人間の自律性を抑圧しないためには、対話的な IA（Intelligence Amplification）が必要。

社会（他律システム）と人の心（自律システム）の係わりの問題の重要性（いかに寄り添うか）、哲学・宗教とのかかわりなど、参加者との質疑応答と議論が行われ、“人間中心の情報システム”についての考察を深めることができた。

AI については世界的に議論が行われており（その中にシンギュラリティ仮説もあって）、わが国の専門家も甲論乙駁の状態だが、“基礎情報学にもとづく人間中心の観点に立たなければ、AI も含めて先端情報技術の的確な考察は難しい”ということが示された。

## 2.2. 組織コミュニケーション論

第9回研究会（9月22日）は“組織コミュニケーション論”と題し、HIS研究会、IS技術者のためのPsytech研究会、基礎情報学研究会の三つの研究会の合同研究会として開催した。

三つの研究会から、それぞれの研究会の主旨、研究課題や参加者の関心事について説明があった後、辻本 篤先生（北海道大学大学院 メディア・コミュニケーション研究院 准教授）に「イキイキと働ける職場環境にするには？」のタイトルで、基礎情報学のHACSモデルで考えた“イキイキと働ける職場環境”への取り組みに関する研究についてお話しいただいた。

- ・基礎情報学との出会いとHACSモデル、組織論におけるHACSモデル適用の醍醐味。
- ・Franc Francの商品開発の事例研究
  - 開発現場でHACS的合意が実践され、従業員が“働き甲斐”、“イキイキと働いている感”を抱いている（感情表現と感情共有）。
  - HACS的合意の実践における一次観察者と二次観察者の役割、主観的イメージの形成と客観的妥当性や組織的役割の付与。
- ・働く現場では、一人ひとりが言語化できない思いや価値観を一次観察者として持っているが、マネージャが二次観察者として、それらを言語化して組織化することで、客観化し組織的価値にすることができる。それが再び個人にフィードバックされて“働き甲斐”につながる。

HACSモデルの意味、作り手の自律性や主体性、ITエンジニアやSEの職場との係わりなどについて質疑と議論が行われた。特に“他律的な職場”で働くISエンジニアにとって、人の心（自律システム）の係わりが重要であることが明らかにされた。また、日本人はハードウェア（もの）には息吹を感じ、ものづくりで成功したが、ソフトウェア（情報）を身体感覚でとらえることができていない、人間を機械として見る傾向がでてきた、などの指摘があった。

組織内のコミュニケーションを考える上で“人間中心の観点到立つ”ことが重要であることをあらためて考える好機となった。

## 3. まとめ

引き続き“人間中心の情報システム”についての議論と考察を深めていきたい。情報システムの研究、開発・運用の現場の多くの方々の研究会へのご参加をお願いいたします。

### 参考文献

- [1] 西垣 通, “AI 言論”, 講談社選書メチエ, 2018
- [2] 辻本篤, “情報が組織化されるプロセス” (Francfrancの商品開発のモットー・販売スタイルー日常の息吹を身体感覚/感情で知覚することから一), 共著『桁違い効果の経営戦略』芙蓉書房出版, 2011